

分担研究概要

国立武蔵療養所神経センター

有馬正高

発達遅滞乳幼児の大多数は、一度は医療機関を訪れるから、その場で、全般的な評価と予後の見通し、日常の健康管理、薬物療法などの狭義の医療の対策と同時に、家庭や養育機関における生活指導についても必要な助言を与えることが望まれる。本研究グループの研究目的は、医療機関が独自に果すべき役割りと、家庭や養育機関から医療機関に求められるものを知り、お互いの協力関係を樹立しつつ子供の全般的な発達を伸す対策を作り出すことを企画してきた。本年度は、昨年からの継続とともに、研究組織に、保健、栄養指導のあり方についての協力班員（小松班員）を加えた。

認知障害に焦点をあてた治療教育プログラムの開発は、小児精神外来のデイケアにおいて、認知発達段階を評価し、それにあわせて、概念形式（類別、比較、上位）、および、身体図式の形成（協調運動、バランス、持続、模倣）を向上させるプログラムを立案実施して効果をみたものである。発達のベースは、訓練開始前に比し特に運動、生活習慣が向上したが、言語、社会領域の伸びはおそい。この研究は、保育所、幼稚園、小規模通園施設などにおける療育の進め方のモデルになり得るよう発展を期待したい。

多動に対する刺戟剤は年長児童から学童について試みられてきたが、本研究は一步進め、薬物濃度と行動変化の関係を明らかにしようと企図している。一般に、薬物の効果判定は、プラセボ効果や自然の消長に注意する必要があるが、多動の場合、教師の判定が比較的客観性をもつようであった。現時点では、注意、情緒、行動面への効果が期待されたが、投与

量や有効体液濃度の決定には症例の追加が必要であろう。

発達遅滞児が、疑われてから医療機関を受診するまでの経路は時代とともに変化がみられるが、運動のおくれやけいれん等、見て判る異常に比し、精神面の遅れは発見も療育のルートにのるのにも遅れる傾向があった。この点は、本年度の回顧的調査においても再確認された。この問題は、早期療育の普及とともに、無視し難いものになるだろうが、遅滞乳児をまず扱う保健所や医療機関における評価と事後指導の体制にも影響を及ぼすであろう。

てんかんは頻度が多いが病像も多様であり、生活管理について多くの混乱がある。てんかんに対する一般の認識がまだ十分でないことは本年度の調査成績においても明らかであるが、従来の方習を考れば近年かなり進歩したという印象もある。今後、医療と生活現場をどう結びつけるかを示す具体的対策についての研究を進展させたい。

本年度からはじまった遅滞児の一般健康調査は、遅滞児に小児内科的異常が高率にみられることを示している。この点については、重症心身障害児については従来からも指摘されてきたことであるが、運動機能に粗大な変化を認めない精神遅滞児についての系統的な検討は乏しかった。生命の危険には至らなくても、教育訓練の機会を減ずるだけでなく、脳の発達自体にも阻害因子となり得るので、効果的な健康管理の基準になるような研究を続行する必要があるだろう。発達遅滞の原因となつた基礎疾患固有の問題、中枢神経異常ともなう二次的な問題、および、生活様式や養護の不適当さによる問題に分類し、それぞれ

の対策を考える必要を感じる。

以上、本年度は具体的な成績を示しつつ今後
の問題点について考察を加えたが、来年度
はさらに足りない分を補い、対策の基準づく
りに着手したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



発達遅滞乳幼児の大多数は、一度は医療機関を訪れるから、その場で、全般的な評価と予後の見通し、日常の健康管理、薬物療法などの狭義の医療の対策と同時に、家庭や養育機関における生活指導についても必要な助言を与えることが望まれる。本研究グループの研究目的は、医療機関が独自に果すべき役割りと、家庭や養育機関から医療機関に求められるものを知り、お互の協力関係を樹立しつつ子供の全般的な発達を伸す対策を作り出すことを企画してきた。本年度は、昨年からの継続とともに、研究組織に、保健、栄養指導のあり方についての協力班員(小松班員)を加えた。

認知障害に焦点をあてた治療教育プログラムの開発は、小児精神外来のデイケアにおいて、認知発達段階を評価し、それにあわせて、概念形式(類別,比較,上位),および、身体図式の形成(協調運動,バランス,持続,模倣)を向上させるプログラムを立案実施して効果を見たものである。発達のペースは、訓練開始前に比し特に運動,生活習慣が向上したが、言語,社会領域の伸びはおそい。この研究は、保育所,幼稚園,小規模通園施設などにおける療育の進め方のモデルになり得るよう発展を期待したい。